

編集 後記

本号に掲載されている連載「社会と健康を科学するパブリックヘルス」(13)「疫学研究と臨床研究の接点」の著者の上嶋健治教授(京都大学)は私が敬愛してやまない研究者の1人である。

私が上嶋先生に初めてお目にかかったのは今から11年前の2000年7月、第13回日本循環器病予防セミナーの際である。岩手医科大学第2内科学の平盛勝彦教授(当時)が実行委員長で、助教授だった上嶋先生が事務局長であった。当時の上嶋先生はバリバリの循環器内科専門医、私は今でも続いているがこのセミナーのウリの1つであるグループワークの取り仕切り役として会場の安比高原のホテルに乗り込んでいった。

既に時効だから書くが、表事務局長の循環器内科専門医と裏事務局の疫学者が今ひとつしっくりいかなかったのも事実である。しかしながらその後のセミナーで上嶋先生と共に講師を務め、この先生の良さがジワジワと分かってきた。そして上嶋先生の華麗なる転身、京都大学のEBM研究センターに異動されて、臨床研究(というよりも、臨床疫学研究)を取り仕切るようになったのであるから、世の中は面白い。2011年6月には第24回セミナーの実行委員長をされ、しかもそのテキストの冒頭の実行委員長挨拶文書の中に私への謝辞まで入れていただいた。

2011年11月に岡山で開催された第41回日本医事法学会のシンポジウムのテーマは「臨床研究」。上嶋先生に臨床研究の概要とこれを実施する上での規制上の問題点を最初にまとめてご報告いただき、シンポジウムは成功裏に終わった。帰りの新幹線をビールを飲みながら京都までご一緒させていただいたが、そのときに「公衆衛生雑誌の連載がそろそろ掲載される」ということを仰っていた。そのときは「ふむふむ」と聞いていたが、まさか私とその号の編集後記を書くことになるとは思ってもいなかった。偶然とは恐ろしい。

上嶋先生、ありがとうございます。そして、今後ともよろしくお願いたします。(中村好一)

次号予告(第59巻・第1号)

原著

Quality of life of residents with dementia in a group-living situation

An approach to creating small, homelike environments in traditional nursing homes in Japan

……………中西三春, 他

研究ノート

若年脳損傷者の外出における主介護者の介護負担感……………安心院朗子, 他

農村・山間地域に居住する前期高齢者の膝関節痛に対する保健行動

膝関節痛の有無と性差に焦点を当てて……………酒井 優, 他

女子大学生の飲酒行動と意識に関する調査……………上村義季, 他

資料

一次救命処置(BLS)・自動体外式除細動器(AED)の技術習得と実施に関連した学校教職員の認識……………清水裕子, 他

連載

ヘルスサービスリサーチ(18)……………西 晃弘

社会と健康を科学するパブリックヘルス(14)

……………石崎達郎